

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和2年度病虫害発生予報第3号(6月)について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

果樹カメムシの果樹園への飛来状況に注意!

本年のチャバネアオカメムシの常緑広葉樹林の落葉中における越冬成虫数は、前年より多く、ナシでの被害が多かった2018年、2014年並でした。

また、4月1半旬～5月4半旬までのチャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの、予察灯とフェロモントラップによる誘殺虫数も、前年より多く2018年並で、多くの果樹園内で4月下旬頃から成虫が確認されています。

今後8月にかけてウメ、モモ、スモモ、ナシ果実等での被害が多発すると予想されます。

果樹園への飛来状況の把握に努めるとともに、予察灯やフェロモントラップが設置されている地域では、誘殺が増加する時期と量に留意し、必要に応じて薬剤防除を行いましょう。

具体的な防除対策は、県ホームページに掲載している『令和2年度版病虫害・雑草防除の手引き』を参考にしてください。

URL : <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/bojonotebiki.html>



スモモとチャバネアオカメムシ



モモの吸汁被害



ナシの吸汁被害

〈予想される向こう1か月の天候(令和2年5月30日～令和2年6月26日)〉

平年と比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は高い確率70%です。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並20 高70% 平年より高い 見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い 見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない 見込み

(福岡管区气象台 令和2年5月28日発表抜粋)

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
カンキツ	そうか病 ミカンハダニ	やや多 少	やや多 やや少	やや多 少
ナシ	黒星病 ハダニ類	並 並	やや多 並	多 並
カキ	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少 やや少 並	並 やや少 並	多 並 並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	(前年より多)	—	多
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ チャノミドリヒメヨコバイ	並 やや少 多 並 やや少 やや多 やや多	やや多 並 多 並 並 やや多 やや多	多 多 並 並 並 やや多 やや多

*果樹共通・チャバネアオカメムシの発生量(現況) 平年比は年次変動が大きいため—としている。

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発病葉率 0.3% (平年 0.2%、前年 0.3%)

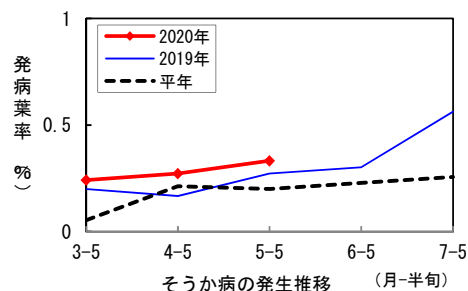
発生ほ場率 30.0% (平年 12.1%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉は園外に持ち出し、幼果期の防除を徹底する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 9の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発生葉率 2.2%（平年 7.3%、前年 3.0%）

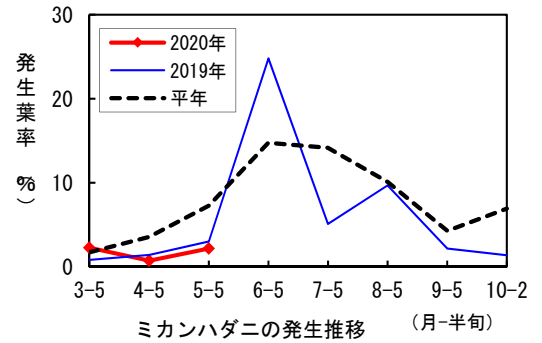
発生ほ場率 27.3%（平年 46.8%、前年 45.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

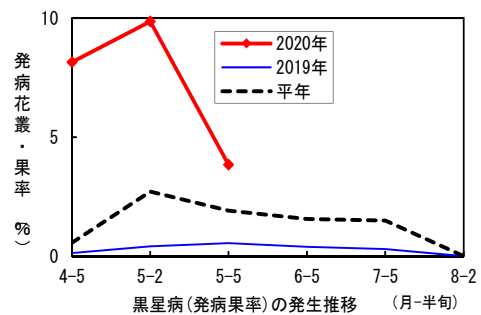
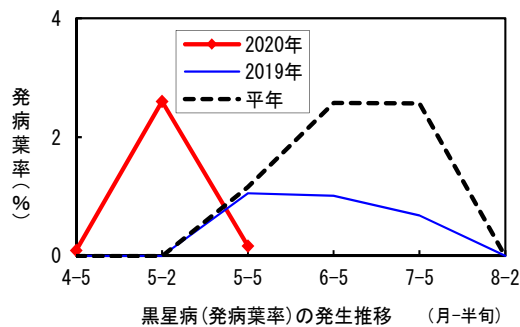
発病葉率 0.2%（平年 1.2%、前年 1.1%）

発生ほ場率 30.0%（平年 58.5%、前年 54.5%）

発病果率 3.8%（平年 1.9%、前年 0.5%）

発生ほ場率 40.0%（平年 53.4%、前年 45.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アザリルピリジソ）剤は同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。

エ 「幸水」の果実は開花60日後（6月上旬）以降、再び感染しやすくなるため、果実への感染防止に努める。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発生葉率 0.2% (平年 0.3%、前年 0.5%)

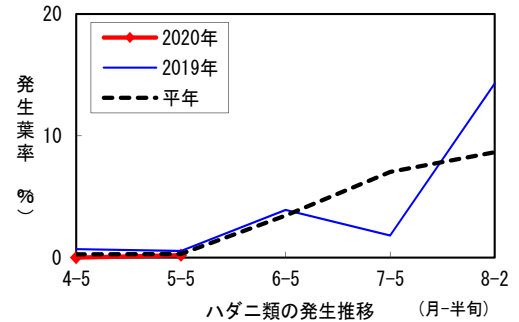
発生ほ場率 20.0% (平年 8.8%、前年 36.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー~±)。

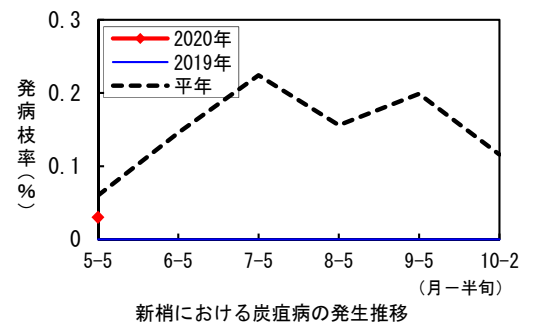
発病枝率 0.03% (平年 0.06%、前年 0%)

発生ほ場率 9.1% (平年 9.8%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

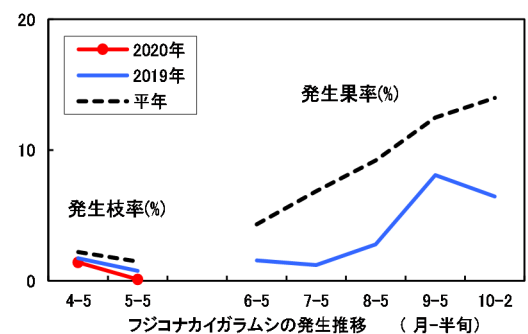
(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(ー~±)。

発生枝率 0.1% (平年 1.5%、前年 0.8%)

発生ほ場率 9.1% (平年 43.2%、前年 54.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹上での第1世代幼虫の孵化時期を確認し、約10日間隔で2回防除を実施する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。

ウ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量： 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャノコカクモンハマキとチャハマキの誘殺雄成虫数は平年並であった（±）。

誘殺数	チャノコカクモンハマキ	225頭（平年 312頭、前年 349頭）	<うきは市>
		761頭（平年 384頭、前年 812頭）	<八女市>
	チャハマキ	11頭（平年 32頭、前年 34頭）	<うきは市>
		100頭（平年 77頭、前年 250頭）	<八女市>

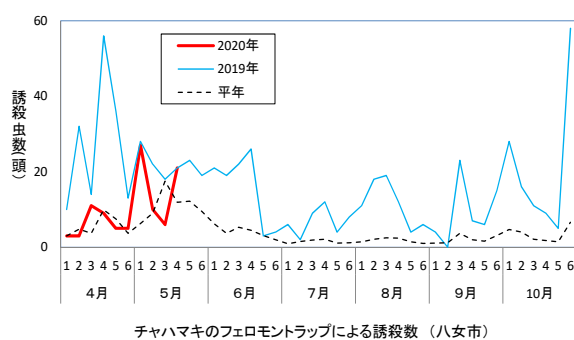
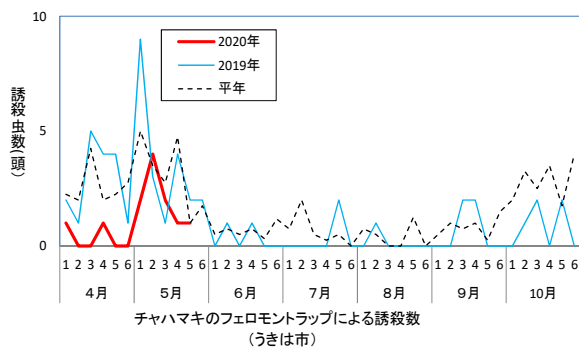
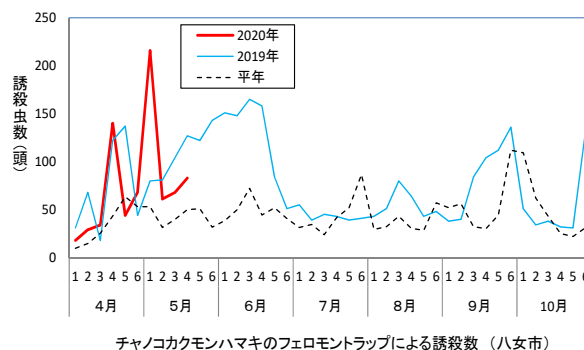
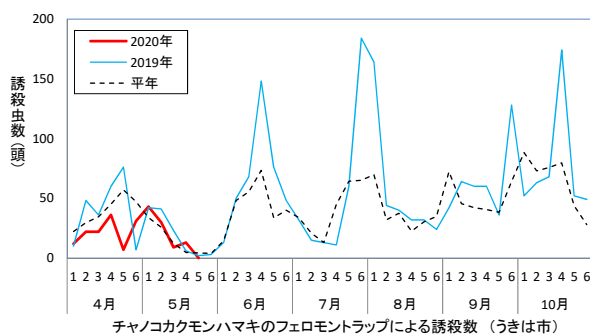
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキとチャハマキの第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。

ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量： 前年より多（2018年並）

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年より多く（+）、越冬成虫数が同程度であった2018年並であった。

誘殺数	1頭（前年 6頭、2018年 134頭）	<宗像市>
	1,208頭（前年 36頭、2018年 576頭）	<筑紫野市>
	538頭（前年 0頭、2018年 165頭）	<うきは市>
	10頭（前年 1頭、2018年 88頭）	<八女市>

イ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年より多く（+）、2018年並であった。

誘殺数 10頭（前年 8頭、2018年 643頭）＜飯塚市＞
 673頭（前年 48頭、2018年 712頭）＜筑紫野市＞
 111頭（前年 4頭、2018年 116頭）＜朝倉市＞
 289頭（前年 16頭、2018年 302頭）＜久留米市＞
 21頭（前年 1頭、2018年 15頭）＜うきは市＞
 3,051頭（前年 280頭、2018年 2,300頭）＜八女市＞

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

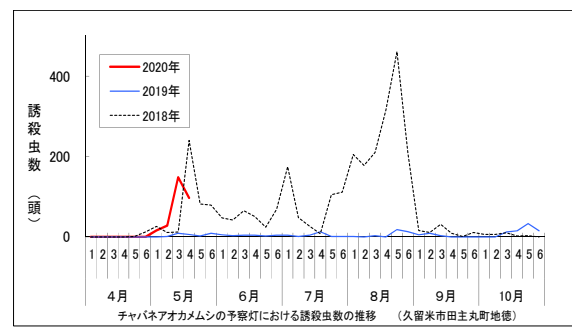
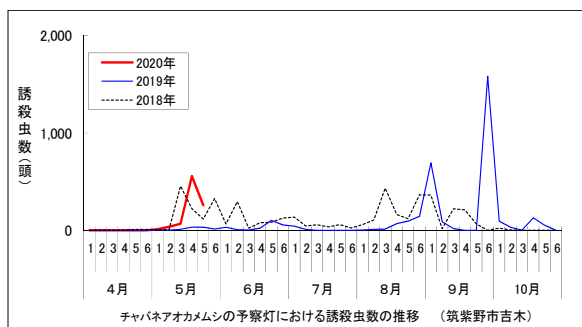
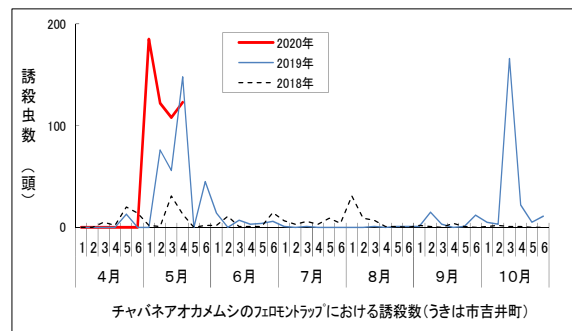
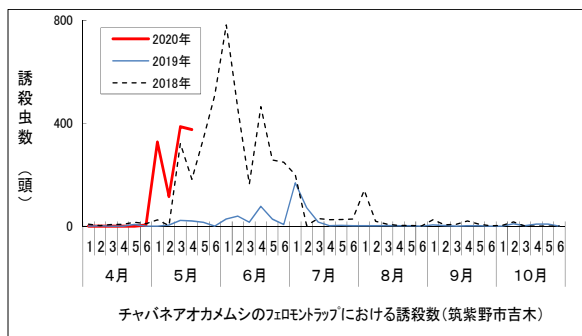
ア 夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と地域の予察灯やフェロモントラップの誘殺状況を確認する。

イ モモ、スモモ、ウメ、ナシ等への飛来や被害の発生状況は、地域や同一園内でも偏りがあるため、園内全体を注意して見回り発生に応じて防除を行う。

ウ カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除に心掛けるとともに、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

また、降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。



【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

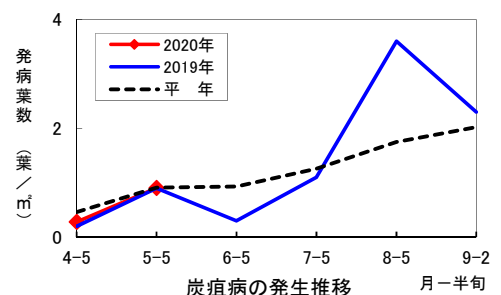
(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉数 0.9葉（平年 0.9葉、前年 0.9葉）

発病ほ場率 71.4%（平年 40.2%、前年 87.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上の注意

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため降雨が多い6～9月に発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、9 pの内容を確認の上、適切に実施する。

2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかつた（-～±）。

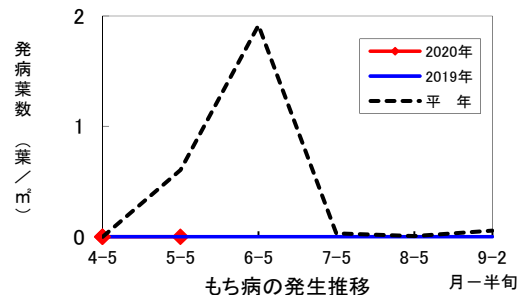
発病葉数 0葉（平年 0.6葉、前年 0葉）

発病ほ場率 0%（平年 13.2%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上の注意

ア 6～7月に降雨が多く、多湿の場合に発病しやすい。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

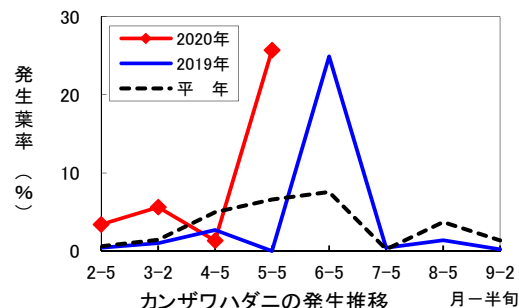
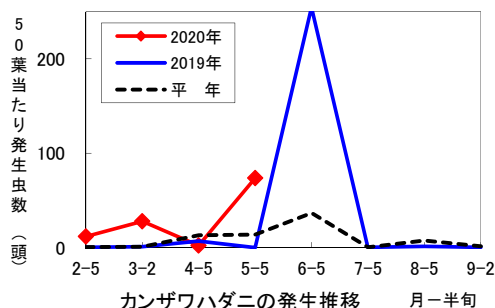
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かつた（+）。

50葉当たり虫数 73.6頭（平年 13.7頭、前年 0頭）

発生葉率 25.7%（平年 6.6%、前年 0%）

発生ほ場率 100%（平年 42.9%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上の注意

ア 6月上～中旬まで発生量が増加するので、発生状況をよく観察し、発生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

1㎡当たり葉巻数 0.05葉（平年 0.01葉、前年 0.1葉）

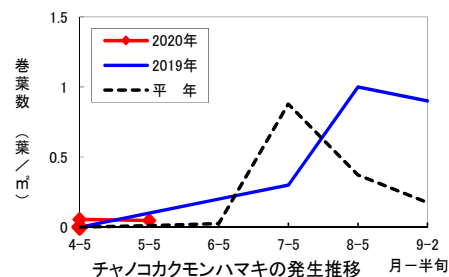
発生ほ場率 14.3%（平年 2.8%、前年 25.0%）

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、平年並であった（±）。

誘殺数 225頭（平年 312頭、前年 349頭）<うきは市>

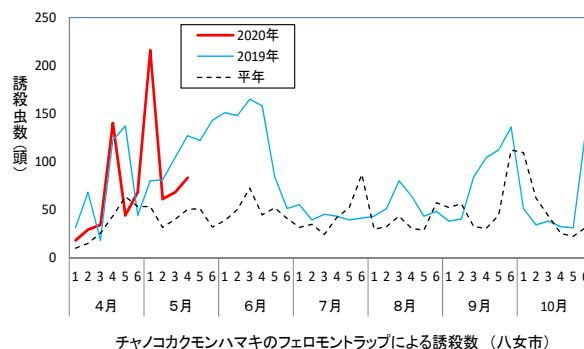
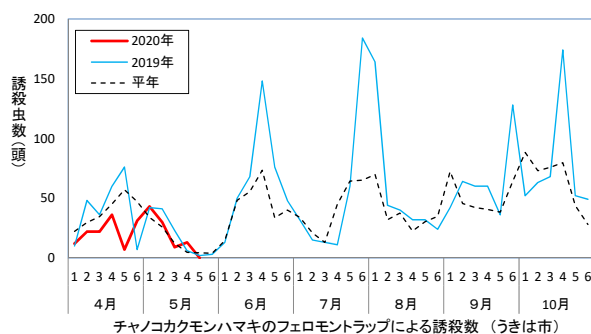
761頭（平年 384頭、前年 812頭）<八女市>

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）



(3) 防除上の注意

- ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。
ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら、直ちに防除を行う。



5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

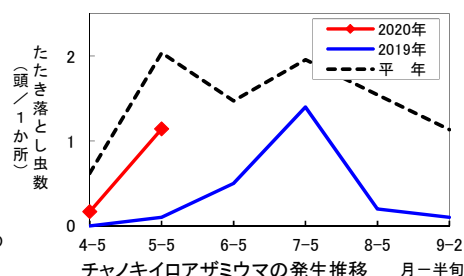
たたき落とし虫数 1.1頭 (平年 2.0頭、前年 0.1頭)

発生ほ場率 42.9% (平年 65.1%、前年 25.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発生量は5月中旬から増加し、6～7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



6 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

発生葉率 4.3% (平年 1.2%、前年 1.8%)

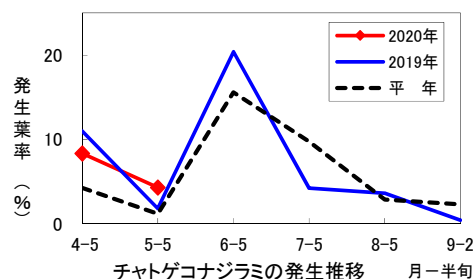
発生ほ場率 85.7% (平年 18.1%、前年 50.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、山間地では5月下旬～6月上旬頃(平坦～中山間地では5月中～下旬頃)であるため、成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との防除を徹底する。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



7 チャノドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

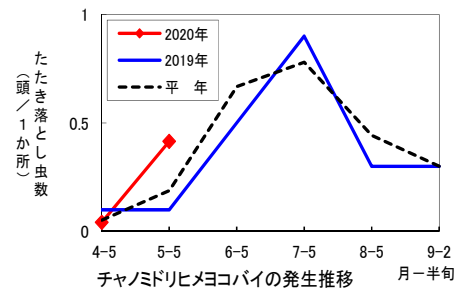
たたき落とし虫数 0.4頭(平年 0.2頭、前年 0.1頭)

発生ほ場率 71.4%(平年 30.9%、前年 25.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 二番茶期の発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬を使用する機会が増える6月から8月を農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、「令和2年度農薬安全使用運動」期間と定め、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組みを強化しています。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

